トラック環礁内で、私は地獄絵を見た

太宰府市　　竹井　慶有

連日、彼我の凄烈な空と海での闘いが続けられているラバウルの松島基地から、戦闘要務打ち合わせのために、私は零式水偵（３人乗り）を操縦しながら、夜間、単機で１３０００㎞、６時間をかけて、トラック諸島の夏島にある水偵基地を訪れていた。

驚いたことには、このトラック基地の周辺部を見た限りでは、ソロモン、ラバウルの攻防戦などとは『どこの国での話か』といわんばかりの、一見のどかな風景である。

いつもであれば、広大なリーフに囲まれて、波も静かな艦隊泊地には、わが連合艦隊の総力が結集していて、海、空、陸ともに殺気を感じるぐらいの活気を呈していたのに、その連合艦隊の主力が風を喰っていち早くパラオ方面へ後退しているとかで、広々とした泊地には「阿賀野」「那珂」といった二等巡洋艦が、数隻の駆逐艦とともにわずかに錨を降ろしているといった状況であったためでもであろうか。

ただ、泊地に連合艦隊は不在でも、輸送船泊地や、連合艦隊泊地の一部には、大量の輸送船、送船団が入港していて、それらの船の囲りでは荷役その他で忙しげに海上を往き来している多くの小船が見えている。

夏島の水偵基地の対岸には、手の届きそうな近距離のところに竹島という小さな島があって、陸上飛行場が設営されている。そこの滑走路上では、零戦の数機が盛んに離着陸訓練を繰り返していて、その手前の岸壁では、横付けしている一隻の小型空母から零戦かとも思われる小型機を、母艦のデリックを使いながら次々と揚陸している。

日本の本土から南へ３４００㎞、いわゆる赤道直下の洋上に浮かぶこのトラック諸島は、周囲２００㎞におよぶリーフを自然の防波堤にして、そのなかに大小８０にもおよぶ島々を浮かべているといった自然条件に恵まれていることから、わが海軍では、ここを南方進出の一大拠点に位置付け、その開発、整備を進めているところで、開戦以来、一大補給基地としても使用している重要地点でもあった。

トラック諸島と、その周辺の気候は快適である。

ぎらぎらと照りつける太陽光線をうけると、暑くて仕方ないが、一歩日陰に入ると湿気が少ないので、吹き出していた汗もすぐに引き込み、常時流れているそよ風が肌に気持ちよい。

ラバウルや、ブカの水偵基地で苦労している生活環境に比べると、ここでの生活はまさに天国の感さえある。

「空襲！空襲！」と、拡声器がけたたましく報じ始めた。

あわせて『対空戦闘』のラッパが鳴り響くなかに、早くも、そこかしこから「ドドン！ドドン！」という爆弾の炸裂する音が上がり、木造平屋造りの宿舎は激しく揺れ動いている。

前夜から仮寝のこの宿舎で、久し振りに南国の快適な一夜を、ぐっすりと寝込んでいた私た

ちは、「そら！来たぞ！」とばかりに、あわてることもなく、素早く飛行服を身につけて、舎外に飛び出したが、防空壕がどこにあるのかさえも知らないので、ひとまず、近くの椰子の木の下に身を伏せた。

昭和１９年２月１７日未明のことである。

夜明け前の薄暗い上空では、敵、味方の双方から撃ち交わしている砲火と、火箭のなかを掻い潜るようにして降下してくる無数の敵小型機が見えている。

敵機動部隊によるトラック空襲であるという。

「ドンドン、バリバリ…」は、約１時間ぐらい続いた。

夏島の水偵基地付近では、木造家屋等が爆風で吹っ飛ばされている。そのうち、夏島の重油タンクがやられ、めらめらと噴き上げる紅蓮の炎と、これを包む黒煙が天空高く立ち上りはじめた。

間もなく、敵機の第二波攻撃が始まった。

今度の攻撃目標にされている竹島飛行場では、昨日、荷揚げされたばかりの新品の零戦が、敵機の爆撃を受けて、木っ葉微塵に吹き飛ばされている。ソロモン、ラバウルの前線では、皆がこの零戦の到着を今日か、明日かと待ちわびているのにと思うと、残念至極である。

トラック諸島の上空に、反抗するはずのわが零戦隊が皆無であると承知した敵機の大軍は、上空を悠々と飛び続けながら、地上を銃撃したり、海上の輸送船を爆撃している。

わが防備隊は、高射砲や機銃で必死の防戦をしているが、何しろ空中の敵機はその数が多く、しかも、小型機で敏捷な動きをするので、わが方からの射撃照準が定まらず、敵機を追い払うまでには至っていない。

陸上施設が壊滅的打撃を受けているが、海上に停泊中の輸送船団に対する攻撃は、より凄烈を極めていた。

５０００ｔから１００００ｔという巨大な船体を、そこかしこに浮かべているが、全く無防備の各船は空から攻撃してくる敵機の前に、格好の目標をさらしているといった感じである。

そして、これらの輸送船を護衛してくれるはずのわが軍は全くいない。

それではと、ほんの申し訳程度に装備している機銃で、各船ともそれぞれに必死の防戦をしているが、次から次にと急降下しながら爆弾を落としていく敵機の下で、どうすることもできない状態である。

輸送船の乗務員としては、この見殺しにされたも同然の状況のなかで、敵襲の第一報でいち早くリーフの外に脱出したいったわが巡洋艦や、駆逐艦の行動をどのように考えていたことであろうか。

泊地のいたるところで、輸送船が火災を起こし、黒煙を上げている。また、被爆して沈没していく船も多い。

大型船が沈み始めてしばらくすると、急に船尾が海中に沈み、次に、船首を沖天高く上げて、船全体が海面に垂直に立った後、「ズドーン」という大音響を立てながら、棒立ちになって、

船尾から海中に沈んでいく。

断末魔の様相とは、まさにこのような光景であろうか。

南の前線では、「軍需物質が足りない、早く早く」の催促を呼応して、幾多の危難を乗り越えながら、海路はるばると運んできたであろうに、それが、このように輸送目的地を目前にしながら敵機の攻撃を受け、誰一人として援護してくれる者とてもいない海上で、船もろとも海中深くに沈められていく多くの輸送船乗組員たちの無念さは、如何ばかりであろうかと思うと、戦争の残酷さをしみじみと感ずるのであった。

敗戦から既に５０年、あの時、全国民が一丸となって戦った太平洋戦争は、次第に歴史の範疇に入りつつある。

この際、戦争の是非はともかくも、あの戦争の第一線で多くの日本人が死んでいったが、その想像を絶するような修羅場のなかにも、ひたすら『祖国日本の永遠』をのみ念じながら散華していった若い生命が、いかに多かったかということを、私たちは決して忘れてはならないと思う。